
ブラックウルフ ~ダーククロニクル~

シャドウウルフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックウルフ ～ダーククロニクル～

【Nコード】

N7543X

【作者名】

シャドウウルフ

【あらすじ】

無数に枝分かれし、存在する世界。そして、それを監視する者達。監視者の一人、狼の名を冠する者はその役目を放棄し、永遠にも等しい無意味な時間から解放されるべく、別世界へと旅立って行った。彼の旅路の果てに待ち受けるものは、一体何なのか？

この作品は作者が書いている二次創作小説に登場させてるオリキャラの世界が舞台の作品です。初のオリジナルな上に、もともと二次創作小説のために用意した穴だらけ設定のキャラの世界が舞台です。

ので、定期的更新はほぼ不可能です。超亀更新の作品でもよろしい
という方だけお読みください。

第一話 決別、そして旅立ち

「……………」

ここは人気のない山奥に建てられた、とある神殿。

その神殿内の薄暗く、長く続く廊下を白い導士の装束を身に纏った長身長髪の黒髪が特徴の、外見は二十代後半ぐらいの男が無言で歩く。

彼が足を一步一步進めるたびに、コツコツと足音が廊下内に響き渡る。

終始無言で足を進めると、やがて巨大な扉に突き当たり、男はおもむろに扉を開き、目的地である部屋の中に足を踏み入れる。

部屋の中には、彼と似たような装束を身に纏った男たちが三名おり、部屋に居る男達の視線が、入口の前に佇む男に集中する。

「……………やっと来おったか。黒狼、予定の時刻はとうに過ぎていぞ」

「だからどうした？ 私と貴様らは協力関係にあるわけではない。故に貴様らが決めた時刻を守る義理など無い……………」

中年代の男が、入口の前に立つ、黒狼と呼ばれる男を咎めるが、黒狼は涼しげな顔でその言を受け流す。

「貴様……………相変わらず我らに対し反抗的な態度を……………」

「ふおつふおつふお。まあ良いではないか。こやつと儂らの関係が
険悪なのは今に始まった事ではない」

もう一人の、背の低い初老の老人が心底面白そうな笑みを浮かべな
がら二人の仲裁に入り、中年の男はしぶしぶ引き下がる。

「それで、私に一体何の用だ？ 老いぼれども……」

「ふおふお。相も変わらず口の悪い男じゃのう」

「いいから話を先に進めろ。私は暇ではないんでな」

黒狼は苛立ちを顔に出しながら男達に話を先に進めるように促す。
老人は黒狼のその態度に、ひょいっと肩をすくめ、隣に立つもう一
人の男に視線をやり、黒狼と同年代に近い外見のメガネをかけた男
が話を進める。

「やれやれ。その様子ではちよつとした世間話も出来そうにありま
せんね。黒狼、もう少し心にゆとりを持たらどうですか？」

「貴様にそんな事を言われる覚えは無いな。……ところで、貴様の
相方はどうした？」

「ああ、彼には別件を与えていますよ」

「なるほど。この世界絡みの事か……」

「まあそれもありますが、貴方と彼が顔を合わせたら、話どころではなくなってしまうのでね」

「フツ、そうだな。……では、用件を聞こうではないか」

「そうですね。……黒狼、貴方に幾つか確認したい事があります。私の質問に正直に答えてくださいね」

「ああ……」

「まず一つ目です。貴方は、彼と協力関係には？」

「あの筋肉達磨に協力する気など無い。一緒に居るだけで疲れるからな……」

「ふむ。では二つ目。私達の邪魔をする意思は？」

「無い」

「なるほど。では三つ目。貴方は……これから先もずっと今の立場を貫くつもりですか？」

「……回りくどいのは嫌いだ。ハッキリと要点だけを言え……」

黒狼の表情が険しくなり、メガネをかけた男に鋭い視線が向けられる。

「怖い怖い。そんな怖い顔をしては、せっかくの美男子が台無しですよ？ 黒狼」

「貴様、どうやら殺されたいらしいな……」

「もういい。貴様は下がっている。後は私が話す」

黒狼を咎めた中年の男が苛立ちを募らせながら前に進み出て、二人の会話に割って入ってくる。

「おや、貴方では彼を怒らせるだけだと思つのですがね」

「聞こえなかったのか？ 下がれと言っている……」

「はいはい。ではお好きに」

メガネをかけた男は言われた通り後ろに下がり、二人の会話を見守る事にする。

「黒狼、あの男に協力する気が無いのなら、我らに協力しろ」

「……用件はやはりそれか」

「そうだ。この無秩序に増え続ける意味の無い世界……。それを破壊するのが我らに与えられし役目だ。貴様もいい加減自分の役目を果たせ」

「私には関係のない事だ。それに……そんな役目を私は与えられてなどいない」

「与えられていない？ 放棄しているだけだろう。貴様もいい加減目を覚ましたらどうだ」

「……傀儡が」

「なんだと？」

黒狼のその一言が聞こえ、男の表情は険しいものになり、二人の間に緊迫した空気が張り詰める。

「永遠とも呼べる時間を、ただ同じことを繰り返しながら無為に過ごす人形に成り下がれと、この私に言うつもりなのか？ そのような事、私はお断りだ」

「なら、協力するつもりは無いのだな……？」

「そのようなモノ、初めから有りはしない。私は私の生きたいように生きる。貴様ら老いぼれどもの指図など聞き入れるつもりは無い」

「ふおっふおっふお。ではどうするのじゃ？ 今まで通り、中立の傍観者に徹するつもりか？」

続いて、初老の老人が黒狼に話しかけてくる。

「それません。これ以上貴様らに面を見るのも、正直ウンザリしているんでな……」

黒狼はそう告げ、踵を返す。

「おい、貴様っ！ どこに行くつもりだ！」

中年の男が声を荒げながら黒狼を呼び止めるが、黒狼は背を向けたまま答える。

「貴様にそれを教える必要は無い。ただ……我が望みの成就のために旅に出る……とだけ言っておこう」

「何……？」

「これ以上時間を無駄にしたくない。さらばだ、傀儡ども……」

黒狼はそう告げ、その身を霧散させるように、音も無くその場から姿を消した。

「やれやれ。だから言ったじゃないですか。貴方では彼を怒らせるだけだ」と

「ふおおお。そういつお主が話したところでも、結果は同じじゃったじゃろつて」

「……どうする、追つか？」

「いや、その必要は無い」

中年男の言葉に老人は首を横に振り、その態度にメガネの男は怪訝な顔で老人に訊く。

「おや、どうしてです？」

「奴とは近いうち……そう遠くない未来で再開する、そんな気がするのじゃよ」

「ふむ。まあ、貴方がそういうのなら私は異論はありませんよ」

「……むう。そう言うのなら仕方ない。……では、この世界の件は任せるぞ」

中年男がメガネの男にそう言い、彼も黒狼と同様に、その場から音も無く姿を消した。

「では、私も行きますね？」

「うむ」

続いて、メガネの男がその場から姿を消し、老人だけが一人取り残される。

「ふお……ふおふおふお。黒狼、どう足掻いた所でお主の望みは決して叶いはせぬじゃろうて。まあ、次に再開する時までには、せいぜい足掻いてみせるがいい……」

老人はそう独り言ち、部屋から姿を消して、何も無い薄暗い闇に閉ざされた部屋だけが残った。

第二話 始まり

あの神殿の部屋から姿を消した黒狼は現在、辺り一面が漆黒の闇に包まれた場所、彼の周囲には天体にも見て取れる星のような小さな球体が無数に浮かんだ奇妙な空間に身を委ねながら周囲の球体に眼をやっている。

「これでようやく、あの忌々しい連中と袂を分かつ事が出来たというものだ……」

黒狼は宇宙という表現が一番ふさわしい空間内を、まるで川に流されるようにユラユラと漂いながら一人ブツブツと呟き、次々と周囲に浮かんでいる球体の内部を覗き、品定めするように観察する。

「フツ……まったく、無数に増殖する世界を監視するだけの傀儡から解放されるために、結局は他の世界を頼るしかないとは……何とも皮肉な話だ……」

黒狼は自嘲するような笑みを浮かべる。

「この世界は……ダメだな。……コイツは……これでは話にならん。こっちは……ん……？」

黒狼の眼が一つの球体に止まる。

その球体の中には、筋骨隆々のピンクのビキニパンツ一丁姿のスキンヘッドの大男と、同じく筋骨隆々の弥生人のような髪型をした、燕尾服を羽織った禪姿の大男が悪漢達を相手に大立ち回りをしている姿が映っていた。

「……………これは論外だな」

黒狼は心底嫌そうな表情をし、早々にその場を離れて行った。

「やはりそう都合よくは見つからんものだな。……………ん？　これは…

…」

黒狼の眼が別の球体に止まる。

その球体の中に映し出されていたのは、どこにでも居そうな、ポリエステル製の学生服を着た一人の平凡な男子学生の青年だ。

だが、その学生が居る場所はという訳か辺り一面にも無い、ただ果てしない地平線が続くだけの荒野。普通の学生が居る場所としてはあまりにも場違いである。

そして、その学生の周りに集まっている、鋼の剣や槍を手にした美少女達。

そこには、青年が女性達の中心に立ち、彼女達を率いて、獣のような仮面を付けた部族の大軍勢を相手に戦いを繰り広げている姿が映し出されていた。

「下らん。これこそ論外だ……」

黒狼は球体に映る少年に侮蔑の視線を向け、その場から離れていく。

「必ずどこかに有るはずだ。私が降り立つのにふさわしい、そして……私の望みを叶えてくれる人物が居る世界が。……ん、あれは……」

黒狼の眼に留まる一つの球体。だがその球体は、他の球体に比べると光の輝きは鈍く、今にも消え入りそうになっていた。

「これは……消えかかっている世界か？　しかし……何なんだ、この胸のざわつきは……。このような世界に何かあるとは思えんが、一応見てみるか」

黒狼は目の前の球体を覗き込んでみる。

しかし、球体に映し出されるのはノイズの走った不鮮明な映像だけだった。

「やはり何も無いな。まったく、時間を無駄にしただけか……」

黒狼は落胆したように呟き、その場から離れようとする。

だがその時、ほんの一瞬、球体の中にノイズ交じりだが人影が映し

出される。

「ん？ 今のは……人影か？」

人影が気になったのか、黒狼は視線を球体に戻す。

やがて映像が鮮明になりだし、先程映った人影の正体が明らかになる。それは……

「むっ！ これは……っ!？」

球体の中に映っていたのは、服装こそ今の白装束の導士の衣装とは真逆の、ロングコートを羽織った全身黒ずくめ姿だが、紛れも無く黒狼の姿であった。

「これは、間違いなく私だな……。まさか、この世界が……？」

次の瞬間、黒狼と同じ服装をした別の人物が映し出される。

そこに映し出されたのは、緩めのツンツンした赤い頭髪の青年。そして、その青年と黒狼が剣を手に激しく闘う姿。

場所は不明だが、そこに映し出されていたのは、間違いなく二人が殺し合いをしている姿であった。

「……………」

黒狼は無言で映し出されている映像に見入っている。

この瞬間、黒狼の予感確信へと変わった。それに呼応するように球体内の映像もプツリと途切れてしまい、再びノイズだけの映像が映し出される。

「フ、フフフ……クツクツク……フハハハハ！ 見つけた！ ついに見つけたぞ！ 間違いない！ あの男が私の望みを叶えてくれる人物だっ！」

先程までの無表情とは打って変わり、黒狼は狂気の笑みを貼り付けながら高笑いする。

「この世界が私の降り立つべき場所……そして、ここから全てが始まるのだな。では……」

黒狼は眼を閉じ、目の前の球体に右手をかざし、強く念じる。

「名も無き世界よ。私を……この世界へと導けっ！」

その瞬間、辺りが眩い光に包まれる。

それからすぐに光は収まるが、そこに黒狼の姿は無く、あるのはどこまでも永遠に続く漆黒の空間のみだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7543x/>

ブラックウルフ ~ダーククロニクル~

2011年10月20日04時08分発行